

## 第39回 Kozoom28 テーマ「中秋の名月と星座」

清水健二

今年の中秋の名月は9月29日である。一般的には9月中旬から10月上旬に満月になる。「中秋の名月」という風雅な日本古来からの宴を認識し始めたのは私の高校時代だったような気がする。ものごころのつく幼い頃から我が家では、中秋の名月の日は夕刻から、縁側に小机をおいて月見ダンゴに小芋を供え、ススキと花は秋の七草である萩や桔梗を花瓶に生けて、ろうそくに明かりを灯し、月の登るのを待ったことを思い出す。百姓育ちの母親は、当時決して裕福でない貧乏な生活を過ごしていたのに、毎年、名月を迎え、お祈りしてきた習慣があった。月にうさぎが餅つきをしているとかという話も幼い私には抵抗も無く聞き入っていたようである



奈良若草山からの名月

月に思いを抱く日本人は、古代の万葉集には何十首も詠まれていて特別な愛着を持っていた。万葉集の第1人者の柿本人麻呂は「東の野にかぎろいの立つ見えてかえり見すれば月かたぶきぬ」と夜明けの東の空と西に沈む月を詠んだ。また遣唐使として留学し、唐の官僚として生涯を終えた阿部仲麻呂は、「あまの原ふりさき見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」と望郷の念を詠んでいて、私は奈良の若草山を眺めると思い出す句である。

これらは日常生活の中の行動を素直に詠んだ名句である。

万葉時代の歌を広く紹介し指導された、犬養孝氏は奈良明日香村で毎年、中秋の名月の頃に観月会を開き、多くの人たちへ万葉歌を朗詠し親しまれてきた。飛鳥時代の蘇我馬子の古墳、石舞台の広場や、蘇我一族の根拠地甘樫丘から東の多武峯に登る月を愛でてきた。

元々観月会は平安時代に中国から「宴」の形で伝わり、当時の貴族達は酒を飲み交わし歌を吟じたパーティであった。源氏物語にも、紫式部は「月の宴」に酒と音楽が、華やかに展開する様子を綴っている。室町時代には太陽や月への自然崇拜と五穀豊穡の対象として、一般庶民に普及していき、江戸時代は個々の家々の祭り事になり、芋名月と呼ばれるほど身近になったようである。私

の母親も自然崇拝の教えを引き継いで、家族で月を愛でたものである。

芭蕉の「名月や 池をめぐりて 夜もすがら」や、小林一茶に「名月を とってくれろと 泣く子かな」などから名月に寄せる自然な気持ちが見て取れる。また夏目漱石は、日本人は恋人に寄せる思いを語るのに、「I love you」と言わず。「今夜の月はきれいですね」と婉曲表現をする国民性だと言っているのは、何となく言い当てているように思う。

我々同期生が成人式を迎える前後に流行った、菅原都々子の歌、「♪ 月がとっても青いから、遠廻りして帰ろう ああ鈴懸の並木路は 思い出の小径よ・・・」と懐かしく古い歌だが、月にロマンを抱いていた時代を過ごしてきた。しかし近年では各地の社寺で、観月会がきらびやかな平安調の催事で観光客を呼び込むイベントに変化してしまった。京都や奈良では各地域で盛大に行われ、奈良・猿沢の池では「采女祭り」と称して、観月会が人々を誘っている。



奈良猿沢池 観月会（采女祭り）

名月と共に夜空を賑わせる星座については、万葉集に詠われている数は少ないが万葉の時代よりはるか昔から、ギリシャや中国には多くの神話や伝説が存在して、そのスケールの巨大さに関わらず、星座に名称を付け歴を導き出す偉業に驚かされる。50年程前に奈良・明日香の高松塚古墳から極彩色の壁画が発見され、石棺の天井壁に星宿図が描かれていることが発見された。



高松塚古墳石棺内 彩色画

石棺の東壁に青龍と太陽、西壁に白虎と月、南壁に朱雀、北壁に玄武の四神が守護神として描かれている。被葬者は今も不明だが、かなり高貴な人で、天上壁は東西南北の四方向に各七つの星座を示し合計28の星座の中心に北極星を置いている。描かれた星座は宇宙のごく一部に過ぎないものの、その元は中国の星宿図がお手本になっている。古代の人々にとって星座は神秘で不思議の世界だったのであろう。星座から古代人は多くの神話や伝説を生み出しているし、日本では七夕伝説として織姫と



彦星の物語は現代にも引き継がれている。星座に関しては日本各地で民話として多く文化遺産になり、人々の心に潤いをもたらし和ませてくれていることは、子どもたちへの情操教育に役立っているのではないかと考えている。

星座をもとに干支が案出され、方位の吉凶や人相、手相など「易」の世界へ拡大展開していったが、確たる根拠は無いものの、人々の体験や推論が暦と絡ませて八卦を創作し、夢を感じさせ惹きつけて来たのはたいしたものだと思っている。

私は写真に興味があったことから、写真仲間と星空を撮影に行き、北極星を中心にカメラを固定し、長時間露光で星の流れを撮ると同心円の美しい軌跡に心ときめかせたものである。10年ほど前、ニュージーランドを旅した時、南十字星を求めて天空を仰ぎ、恐ろしいほどの星座に圧倒されたことを思い出す。まさに星降る如く、我々が北半球で天の川は凄いと眺めていた比でなかった。



北極星を中心の星の軌跡



ニュージーランドの南十字星と星座



坂本九の歌

1960年、永六輔作詞、いずみたく作曲、坂本九の歌、「見上げてごらん夜の星を 小さな星の小さな光が ささやかな幸せをうたっている。 見上げてごらん夜の星を 僕らのように名も無い星が ささやかな幸せを祈っている。手をつなごう僕と 追いかけてよう夢・・・」と口ずさみながら、若い頃を懐かしんでいる。

令和5年9月 記